



まだまだいけるか

成田 忠一

今71歳。58歳頃からの13年間に、大小7回ものガンの摘出手術をした。胃ガン内視鏡摘出手術2回、全摘手術を1回。その4年後、下咽頭ガン。その3年後に、リンパに転移、再び摘出。それから2年後くらいに肺に転移、内視鏡で摘出。その1年後に反対側の肺に転移が確認され、摘出する等、さあこれから人生後半という時にガンとの付き合いが頻繁に続いたが、ここ2年程は落ち着いている。胃が無い、声帯が無い、永久気管孔での呼吸がしにくい、味覚と臭覚の欠落とかその他幾つかの後遺症を抱えているが、幸いなことに自身の手足で行動出来ている。自身の口から食事が出来ている。世の中それも出来ない人たちも多い。まだまだと思うようにしている。無い物ねだりをやめると気持ちが大きく変わる、楽になる。今あるものでやるしかない、そう決めた。

ここまで生き延びていられる要因の一つに企業内健康管理体制、とりわけ診療所の存在が大きかった。定期健康診断制度が充実していたので多くの人がガンに限らず病気の早期発見、早期治療が出来、救われた人も多いと聞く。

私のこれまでの人生は、ことごとく人と環境に恵まれて来た。家族は言うに及ばず、企業でも、地域社会でも、そしてお世話になった主治医も信頼出来た。入院先のどの医師からも治療に対する本気度が伝わってきた。患者として全てを委ねるしかない医師との信頼関係は、その後を大きく変化させる。

この年になると、会話で、目で、対応でその人物とか能力が良く見えるものだ。

医師はよく頑張ったと言ってはくれるが、自分的には頑張ったつもりはあまり無い。ただ見えない先を思い悩んだことは結構あった。そこには、思いを聞いて共に悩んでくれた妻と家族が常に居てくれた。入院中のベッドで2回程だがそれまで見た事の無い夢を見た。あの世とやらからの迎えの夢だった。対岸の先で手招きしている人に向かって川を渡ろうとしている自分がそこにあった。ひどくうなされ汗まみれだった。正直怖かったことも有ったが、私の数倍苦勞し頑張ったのは、妻であり家族だったと心底思っている。感謝以外に言葉は無い。

自力で手足を動かせる、歩ける。数十年続けて来た趣味の盆栽とか、花卉（かき）園芸とか、家庭菜園を今は家族みんなで楽しめている。昨年10月の和歌山花フェスタで、ガーデニングコンテストのコンテナ部門に初出展で入選し、表彰して頂いた。自信が出来た。その事でのおごりはさらさらないが、動けるから出来たし、結果として認められたという自負心は残った。

これからも生ある限り自分流の世界を創造し楽しんで行こうと決めた。まだまだいけそうだ。

